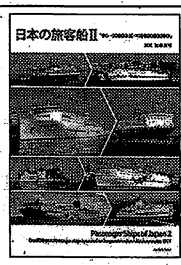
今月の本棚

日本の旅客船Ⅱ

池田良穂・編
日本クルーズ&フェリー学会



本紙「右舷灯」筆者、池田良穂教授編による「日本の旅客船」シリーズの第2弾。クルーズと航海時間2時間以上の長・中距離定期航路に就航する旅客船を写真と技術データで紹介する。

記載データは、運航会社、船名、船主、航路、船種、建造年、建造所、船質、総トン数、国際総トン数、載貨重量、満載排水量、主守法、主機、旅客定員、車両搭載数、乗組員数、航海速力、最大速力、特記事項――と特徴紹介の一文。

クルーズ分野では、著名な「飛鳥Ⅱ」「にっぽん丸」「ぱしふぃっくびいなす」に加え、せとうちクルーズの「ガンツウ」、北方領土墓参などに用いられるマリン・アドベンチャーの「えとぴりか」の日本籍船2隻と、日本起点のクルーズを行う外国籍船「ダイヤモンド・プリンセス」「コスタ・ネオロマンチカ」「オーシャン・ドリーム」「ゼニス」も紹介。

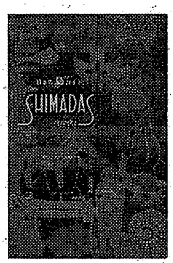
国際フェリー分野では、韓国・中国・ロシアと日本を結ぶ定期航路就航船7隻を紹介。長距離航路分野では200キロメートルを超える航路に就航し宿泊施設を有する船を、中距離航路分野では、航海時間が2時間以上の船を紹介している。

写真は1枚ではなく、異なったアングルからのものを複数掲載しており、さまざまな船姿を鑑賞しているだけでも楽しい。全国津々浦々で活躍する一隻一隻を見るにつけ〝海国にっぽん〟の脈動を実感する。

第1弾「日本の旅客船Ⅰ」では高速旅客船27隻を紹介している。

SHIMADAS（シマダス）

日本離島センター



日本の島のガイドとしてはこれ以上充実したものはないという一冊。1993年に創刊され、今回15年ぶりに新版として発刊された。前版に比べ600島増となる1750島を掲載。「人口」「面積」といった基本情報はもちろん、「みどころ」「特産品」「やど」「交通アクセス」などの島旅に必要な情報のほか、「生活」「学校」「医療」「Iターン」など、本書ならではの多様な島内情報が充実し、さまざまな用途に対応する。

一例として、「生活＝日常生活用品などは各家の自家用船で隣島へ買い出しに行く」「Iターン＝みそ製造者の孫夫婦がUターン、起業し産業振興に取り組む」など。

掲載した「島」の基準は、北海道・本州・四国・九州・沖縄本島を除く、①国勢調査、住民基本台帳いずれかで住民の居住が確認された島、②国勢調査や住民基本台帳では住民の居住が確認できないが、時間的・季節的・中長期的な滞在が見られる島、③わが国の自然や歴史、文化など語る上で大切と思われる無人島。

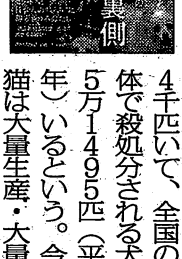
埋立てで地続きになった島や人工島、河川の中にある島は原則除外している。

〝島国にっぽん〟の全景と詳細を居ながらにして俯瞰し、掌握し、楽しめる魅力の一書となっている。

ちなみに本書コラムによると、海上保安庁が、①周囲0・1キロメートル以上、②何らかの形で本土とつながっている島について、それが橋、防波堤のように細い構造物でつながっている場合は島とし、それより広くつながっていて本土と一体化しているようなものは除外、③埋立地は除外――という基準でカウント、発表している日本の「島」の数は6852島である。

「奴隷」になった犬、そして猫

太田匡彦、朝日新聞出版



国内で飼育されている犬猫の推計数は15歳未満の子どもの数より多いという。その数約1855万2千匹（平成30年）。

他方、「商品」としての流通過程で命を失う犬猫が毎年少なくても2万4千匹いて、全国の自治体で殺処分される犬猫が5万1495匹（平成29年）いるという。今や犬猫は大量生産・大量消費されるモノであり、〝不用品〟は大量廃棄されている。ペット関連業は一大産業となり、業界団体、議員連盟もある。

筆者は、ペットブームや関連産業の陰の部分を取材し続け、「犬を殺すのは誰か　ペット流通の闇」（朝日文庫）に続いて本書を執筆した。

今回は、猫ブームの裏側、例えば〝増産〟のために照明を1日12時間以上当てられ（発情しやすくなる）、年3回出産させられる現実――に始まり、ペット産業の構造（ブリーダー→競り市→ペットショップ）、それぞれの現場の実態と本音、法規制の歩みと改正における政治の場での攻防が生々しく詳述されている。

産むための道具として囲いに閉じ込め、生殖能力が衰えたらお払い箱にするブリーダーの実態が何ともやるせない。

一方で、良識ある事業者や状況改善に取り組む団体や政治家がいて、事態が悪化しているばかりでもないことも描かれる。